心理学の立場から 現代の幼児教育を考える（二）

黒田実郎

前号では、幼児心理学にとって、現代は混迷の時代であることを指摘したが、その実状について詳しいことはほとんど触れなかった。今回は幼児心理学の主要課題の一つである認知心理学の一端を紹介し、それと幼児教育との関連についてのべよう。

一、認知心理学の現状と幼児教育

「スポック博士の育児書」で有名なアメリカの小児科医、ベンジャミン・スポックは、彼が一九六七年に書いた「モンテッソーリ保育と伝統的アメリカ式保育」という論文の中で、知的早期教育重視の端緒となった二つの出来事として、一九五七年のソビエトによる世界最初の人工衛星打ち上げと、第二次大戦後のベビー・ブームによる進学競争の激化とをあげている。

一九五〇年代の中ごろまで、科学、政治、経済、その他の分野で圧倒的に世界をリードしていたアメリカにとって、ソビエトによる人工衛星第一号の打ち上げは、確かに国家の威信にかかわる重大な出来事であった。この時、アメリカ国民が受けた衝撃は、スプートニク・ショックと呼ばれ、わが国でもすでによく知られているが、これを境としてアメリカの教育は一つの転換期を迎えたといえる。ちょうどベビー・ブームの波が大学進学の年齢に近づくころでもあったので、知的早期教育に対する要求は、たんに政治家だけではなく、親たちの望むところでもあったのである。

これらの要求と期待に答えて登場したのが、ハーバード大学心理学教授J・S・ブルーナーの認知心理学であった。彼は一九五九年に、全米科学アカデミー主催の初等・中等学校における理数科教育を改革するための会議で議長に選ばれたが、会議終了後、その議事内容に手を加えて、一九六〇年に「教育の過程」と題する著書を出版した。そして、この本は、その後アメリカのみならず、世界の幼児教育や幼児心理学に大きな波紋を投げかけることになった。すなわち、過去半世紀間におけるアメリカ義務教育や就学前教育は、おもにJ・デューイの経験主義哲学や、A・ゲゼルの成熟説にもとづくものであって、子どもの教育はたんなる知

識の詰め込みによるものではなく、日常の生活経験を通して体得されるべきものであり、またレディネスを待って教えることが効果的であると説かれてきた。ところが、ブルーナーの新理論においては、「レディネスは作り出すことのできるものであって、その自然発生的に熱する時期を待つ必要はなく・・・また、どの教科でも知的性格をそのままにたもって、発達のどの段階の子どもにも効果的に教えることができる」ことが強調された。

かつて、コロンビア大学の著名な教育学者W・キルパトリックが、「早期の知的教育は無益というよりも、むしろ有害でさえある」と主張して以来、アメリカの幼稚園（キンダーガーテン）と保育学校（ナースリー・スクール）では、従来、知的教育はタブー視されてきたが、ブルーナーの新理論が発表されて以来、あたかもせきを切った水のように、3R's (Reading, Writing, Arithmatic) の教育を行うところが現われはじめた。また知的教育を促進すると考えられるあらゆる教育学や心理学が再検討されることにもなった。二十世紀初頭に一度はアメリカに導入され、その後数十年間、ほとんどかえりみられていなかったモンテッソーリの幼児教育や、ピアジェの認知心理学が、アメリカで復活し、その影響が世界の幼児教育に波及するようになったのも、もとをただせば、スプートニク・ショックにはじまるブルーナーの認知心理学の台頭が、そのきっかけであった。

私はかつて、アメリカの児童心理学者W・デニスが編集した、「児童心理学選書」の邦訳を出版したが、一九五〇年までの重要論文をまとめたこの選書の中には、成熟説を支持する論文のみが含まれていた。そしてそれらの論文の中には、非常に刺激の乏しい環境で育てられた双生児が、その後、正常に発達したという彼自身の論文も掲載されていた。このように、どちらかというと成熟説の支持者であった彼が、一九六〇年代の後半になると、刺激の少ない環境で育てられたレバノンの孤児院（クレイシュ）(Creche) の子どもは、知的、感覚・運動的に発達が遅れるという、いわば早期教育を重視する論文や著書を発表している。

時代の流れに迎合するかのような学説を唱えているのは決して彼だけではない。前号で紹介したモンテッソーリ教育の心理学的支持者で、知的早期教育の推進者でもあるイリノイ大学のハントも、モンテッソーリの業績を初めて知ったのは一九六二年で、それまでは子どもの認知心理学とほとんど関係のない、パーソナリティの研究者として有名であった。

それどころではない、現代早期教育論の第一人者ブルーナーでさえ、子どもの認知的発達に本格的に取り組みはじめたのは一九六〇年以降のことであって、それまでの彼の専門は知覚、宣伝、世論、意見の分析など、社会心理の領域に属する分野であった。

彼の学位論文はナチスの宣伝技術に関するものであったが、さすがにそれだけのことはあって、彼の早期教育理論も、実質的データが乏しいわりには、幼児心理学や幼児教育におよぼした影響が非常に大きいのである。

ブルーナーが発達心理学に没頭するようになって以来、すでに十数年が経過している。しかし、彼が「教育の過程」で強調した早期教育万能論は、いまだにごくわずかしか裏づけられていない、ピアジェはブルーナーを楽天主義者だときめつけているが、十分な研究的裏づけのないうちに、早期教育論が先行してしまったのは、彼自身にとってはもちろんのこと、幼児教育にとっても不幸なことであった。

二、自由保育の心理学的意義

幼児期における系統的な知的教育の効果に関する実証的研究は非常に少ない。最近、わが国で行われた、ひらがなに関する三神広子の研究、漢字に関する黒田実郎他の研究によると、早期教育の効果は一時的で、学童期にはその効果が消えている。また学童期における英語の早期教育と中学校における英語成績との関連性についての山崎睦子の研究でも、同様な結果が得られている。これらいくつかの研究から判断すると、早期における系統的な知的教育の効果は決して永続せず、一時的なもので、もしもその効果を持続させようと思えば、通常の学習以外に、特別の学習をいつまでも続けねばならない、ということである。

一方、遊びに重点を置いた自由保育の教育的効果も、その客観的評価が非常に困難なため、特筆すべき研究はほとんど行われていない。次に、わが国ではあまり知られていない英米における二つの研究を紹介しよう。

ロンドン大学のD・ガードナーは、児童中心主義的カリキュラムの幼児学校（インファント・スクール）六ヵ所と、伝統的な主知主義の幼児学校十二ヵ所の幼児を比較した。予想通り児童中心主義の教育を受けた子どもは、創造的活動と社会的行動において優れていたが、基礎学科の成績においても、主知主義教育を受けた子どもに比べて必ずしも劣っていなかった。主知主義教育を受けた子どもは筆記（handwriting）においてのみ優れていたが、その効果も一年後には消えた。

シカゴ大学のF・ストロドベッグは、三種類の保育学校（文字指導を行っているところ、許容的な治療教育を行っているところ、自由保育を行っているところ）の子どもの知的発達について比較した。予想に反し、ピーバディ語彙テストとスタンフォード・ビネー・知能検査において最高の上昇を示したのは、自由保育を受けた子どもたちであった。

これらの研究からいえることは、児童中心主義的な教育を受けた子どもや、自由保育をされた子どもは、主知主義的教育を受けた子どもに比べて、知的な面も決して劣っていないということである。もちろん、以上の研究における結果は、たんに保育内容の差異によるものではなく、対象児の家庭の相違によるものでもあろう。しかし、それらの結果は、子どもの知的能力というものが、系統的な知的教育よりも、一見、非組織的とも思われる自由保育によって、よりよく伸ばされることを示唆している。

非組織的経験の効果は、子どもの言語習得過程を見ると明らかである。子どもは、誕生後から日常生活において交される無秩序な会話を経験しているうちに、四、五歳にもなると、自国語を自由にしゃべり、理解するようになる。ところが、系統的に教えられる外国語は、どれほど早期から系統的に教えられても、母国語のようには上達しない。それは、成人が組織的に教える言語教育が子どもの知的好奇心を十分に満たし得ないのみではなく、量的にもかなり限定されているからである。自由に遊び回る四歳児が一日に話す語彙量は、一万語に達するとのべたアメリカの学者がいる。一見、無秩序と思われる膨大な言語的経験から、子どもは無意識のうちに複雑な言語の法則性を把握する力をもっているのである。

一九二九年、アメリカの心理学者ブロジェットは、潜在学習(latent learning)という概念を初めて明らかにした。ネズミを対照群と実験群に分け、対照群には迷路の終点に行きつくと必ず餌が与えられた。すると袋路に迷いこむ回数は急激に減少し、学習の効果が認められた。実験群には、終点に行きついてもはじめのうちは餌が与えられず、自由に迷路を走り回らせた。一定期間後に、終点に餌を入れると、袋路に迷う回数は急激に減少し、翌日には対象群の成績に追いついた。この急激な学習の進歩は、実験群のネズミが知らず知らずに、迷路の全体構造を学習していたことを意味する。

人間の潜在学習に関するスチーブンソンの研究によると、潜在学習能力は、就学前の数年間にいちじるしく増大することが明らかにされている。創造的遊びを主体とする自由保育は、一面において潜在学習的要素をもっている。成人には無秩序に見える子どもの遊びや、さまざまな生活経験は、成人が設定した系統的教育よりも、はるかに豊かな可能性を、子どもの心にはぐくむのではないだろうか。

(聖和女子大学)